

御伝鈔(その10)

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、親鸞没後33年に親鸞聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。続いてその翌年、親鸞聖人の伝記絵『親鸞伝絵』を著わされ、詞書(ことばがき)の部分だけを『御伝鈔』(上巻・八段、下巻・七段)といいます。

第三軸・第五図「稲田興法」

親鸞聖人が越後(えちご)の国より常陸(ひたち)の国を越えられ、稲田の草庵にてご教化されているところが描かれています。右半分は越後の居多が浜をお通りになっているところ、左半分は稲田の草庵でご教化されているところです。



第三軸・第六図「弁円済度」

板敷山(いたじきやま)にて親鸞聖人を殺害しようとした山伏弁円(やまぶしべんねん)が、稲田の草庵に住んでいる親鸞聖人を襲おうとしましたが、親鸞聖人の温顔に接して弓矢を捨てて帰依する情景が描かれています。

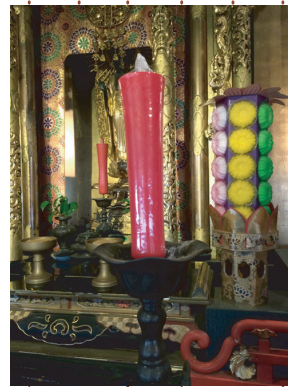
右半分は板敷山の峠で弁円一味が、親鸞聖人を待ち伏せしているところです。左半分は稲田の草庵での情景です。



住職レター

十一月の半ばを過ぎますと、善教寺本堂で勤める報恩講の準備に入ります。お接待当番地区の世話人さんと打ち合わせをして、お斎(報恩講料理)具材の注文。おつぼ菓子やみかんの注文。お荘厳準備にあたり、朱蠟燭(赤いローソク)の購入。

お香炉はいつもより入念に拭き、黒光りするようになります。つい先日は、近所の池田馨様にきて頂き、境内にあります勝如上人御手植松の剪定をして頂きました。



御本尊前の朱蠟燭

親鸞聖人の三十三回忌にあたり、本願寺第三代覚如上人は、そのご遺徳を讃仰するために『報恩講私記』をつくられ、報恩講が勤まるようになりました。



本堂外陣の香炉

善教寺がこの地に開基して五百年。五百年の長きにわたり、善教寺でもこうして毎年勤め続けてきた報恩講です。今後も大切に勤め続けていきましようね。

勝如上人御手植松を剪定される池田馨様

